

調査研究(研修)視察 報告書

視察日	平成26年1月14日(火)
視察内容	新潟県 長岡市 市民協働複合施設‘アオーレ長岡’について
視察者	小野政明、野村康治、蜂須賀喜久好、内田実、川上守、杉浦久直

＜長岡市の概要＞

長岡市は、日本一の大河信濃川が市内中央部を流れ、守門岳から日本海までの広大で豊かな自然環境と多様な地域資源や個性を持った街である。中越地震をはじめとした度重なる災害を乗り越え、人、伝統、文化、風土が織りなす多彩な地域の個性を引き出し、米百俵の心を受け継ぐひとづくり、市民協働の伝統に根ざすまちづくりを進めている。

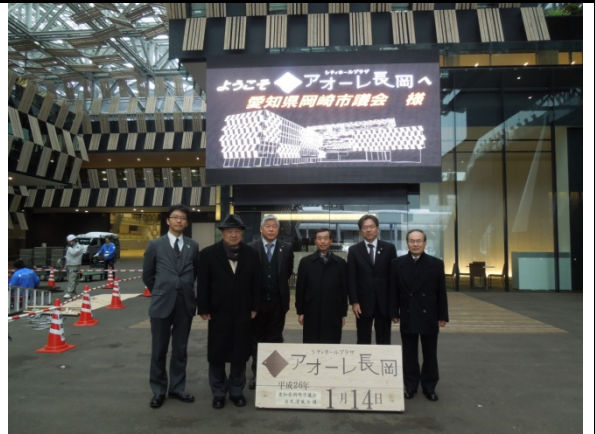
＜アオーレ長岡の施設概要・現状・課題＞

「アオーレ」とは、この地方の「会いましょう」を意味する方言で、様々な人と人、人とモノの出会いが生れるという期待が込められており、公募による命名がされ、命名者は、小学5年生の女の子である。「アオーレ長岡」は、JR長岡駅前の旧長岡市厚生会館及び、周辺の公園を含めた約1.5haに厚生会館機能を受け継ぐ‘アリーナ’冬季でも様々な活動ができる‘ナカドマ(屋根付き広場)’市民により便利な‘市役所本庁機能’市民と議会の一体感を醸し出す‘議場・議会棟’を一体的に配置した複合施設である。アリーナは、広い開口部を開くとナカドマとの一体的な多目的な利用が可能で、ナカドマは、集い、語り合い、様々な活動ができる自由空間であり、中心に位置して他の機能をつないでいる。市役所総合窓口は、ワンストップサービスを提供し、市民は動かず、職員が入れ替わりで対応している。議場は、大勢の市民が集まるナカドマに面した1階に位置し、ガラス張りの広い窓から開かれた施設となっている。特に、JR長岡駅と大手スカイデッキで結ばれ、雨や雪の日でも、駅から濡れることなく訪れる事ができるアクセスは素晴らしい。第一の理念は、「協働・交流の拠点」であり、多くの人が集い、協働・交流することから生まれる賑わいが、中心市街地の再生のキーポイントであり、それに向け、市民協働によるまちづくりの展開とまちなか

型公共サービスの展開を一体的に推進していくことをコンセプトとしている。市民協働の様々な施策が、長岡モデルのまちづくりを支え、市民と行政、市民と市民、行政と経済界をつなぐ協働・交流拠点として、3度の市町村合併による分散意識を一体化していく長岡の顔としての期待を受けている。運営は、利用する市民の視点に立ち、より自由度の高い運営を実現するために、指定管理者制度ではなく、市の直営でもない、役員や運営スタッフは、市民を中心に組織されたメンバーで構成されている。行政は、安定した運営ができるようにした支えとしてサポートし、市民が知恵やアイデアをしぼり、多くの意見を取り入れ、時には共に汗をかく運営スタイルが保証されている。

＜岡崎市への反映＞

中心市街地を再生し、にぎわいを創出することは、本市にとっても最重要課題の一つである。まちなかは、多くの市民にとって利用しやすく便利な場所である。多くの市民が集う施設を岡崎の新しい顔となるような機能を有する施設を核としてまちづくりを組み立てることは有用と考える。長岡市の先進事例は市民のハレの場と市民の協働拠点を融合させたものである。また、市民会館を改修して、長寿命化を図ることとなったが、次のステップとして新文化会館を核とする中心市街地の活性化を市民協働の中心的な施設である‘りぶら’とつなげて、一体化利用を図っていけばと、期待される場所である。



調査研究(研修)視察 報告書

報告者:川上 守

視察日	平成26年1月15日(水)
視察内容	東京都荒川区:区民幸福度について
視察者	小野政明、野村康治、蜂須賀喜久好、内田実、杉浦久直、川上守

<荒川区の概要>

区の東北辺を荒川(1964年に隅田川に名称変更)が流れていることが区の由来であり、都東部に位置。隅田川に育まれた歴史と文化に支えられて発展。約75%が準工業地域で、中小企業が多く存在する。都心に近接した交通の利便性や隅田川の水辺空間下町らしい人情味あふれるコミュニティを基礎とした地域力、モノづくり産業の集積した地域特性など区の強みを最大に活用、心の豊かさや人とのつながりを大切にしたい、区民一人一人が真に幸福を実感できるまちをめざす。幸福度について独自に研究を重ね、12年には「荒川区民総幸福度(GAH)に関する研究プロジェクト第二次中間報告書」を公表し、GAHの指標案及びその活用方法を示した。

面積:10.20km² 人口:203,296人

<荒川区民総幸福度(GAH)の概要>

1 作成に至った背景

荒川区長に就任した西川氏、2004年「区政は区民を幸せにするシステムである」という区政が担うべき仕事の領域を定めより良い区政につなげるため、毎年実施する区政世論調査に幸福度調査を盛り込むとともに、区民の幸福度を測る指標の作成に着手、物質的な豊かさだけでなく住民の幸せを重視しようという考えに基づいている「国民総生産」GNPに変わる国作りの指標としてブータンが掲げる「国民総幸福」GNHに示唆を得たものだが、内容は荒川区オリジナルで住民の幸福感の構成要素の分析や、施策と幸福度との関係性の検討等に基づき、区の基本構想で示す健康・福祉子育て・教育・産業・環境・文化・安全・安心の分野ごとに区民の幸福実感を測る46項目の指標案を発表した。

2 指標の世論調査内容

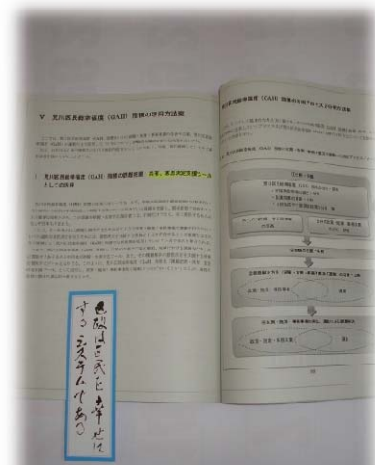
健康・福祉では「健康実感度」「心の安らぎの実感度」子育て・教育では「子どもの成長の実感度」「家族の理解・協力度」といった具合であり、指標の活用方法にも踏み込んでいる。

3 課題・問題点等

この取り組みは職員に、担当する仕事の目的が住民の幸福であることを再認識させるという意味でも効果があるはずだ。ただ行政だけで住民の幸福度を高めることはできない。調査の分析結果では地域活動に参加している人ほど幸福度が高い傾向がある。住民とともに「幸福」について考え、より多くの人に地域に関心を持ってもらい、分かち合い・支え合いの輪を広げていくことにより地域全体の幸福度が高まっていくものと考えている。

<感想・岡崎市への反映>

行政の政策評価は建物・道路・公園をつくることで市民に役立ったかといった評価はされてない。市民が作られた物にどれだけの満足感があるのか、アンケート調査等を行うなど今よりもっと満足を感じられるようにするには何が必要か、市民とともに課題を解決するにはどうすればよいかを考え政策の立案・改善などを行いながら、よいよい市政運営を実現することが大切である。



調査研究（研修）視察 報告書

報告者：杉浦 久直

視 察 日	平成26年1月16日（木）
視 察 内 容	農事組合法人と郷園について
視 察 者	小野政明、野村康治、蜂須賀喜久好、内田実、川上守、杉浦久直

<香取市の概要>

千葉県の北東部に位置し、江戸時代に利根川水運で栄えた佐原市と小見川町、山田町、栗源町が合併して2006年に成立した。香取神宮の所在地。北部は利根川の流域に水田地帯、南部は山林と畑を中心とした平坦地。温暖な気候と肥沃な農地に恵まれ、首都圏の食糧生産地である。

人口は約82,000人、面積は262km²。

<農事組合法人と郷園>

木内博一氏を中心として、平成3年に有志5名での野菜の産直から始まり、平成8年に木内を社長とする株式会社和郷を設立、平成10年に農事組合法人と郷園を設立する。現在千葉県北総地域の約90軒の組合農家が所属し、和郷園グループとして、生産、販売、加工、リサイクル、技術開発、観光、海外展開を手がける。「生産者の自立」を合言葉に、6次産業化の成功モデルとして評価されている。



<用途に合わせた加工>

平成15年3月に経営体育成緊急支援事業による補助金の活用により、年間1,000トンの処理能力を持つ冷凍加工センターを稼働させ、採れたての野菜を急速凍結し、旬の野菜の味を年間を通じて安定供給できることになった。また、野菜の皮む

きや、カットなどの下ごしらえを行うカットセンターにより、外食や中食の業務ニーズに応じた供給を行っている。

<リサイクル>

リサイクルセンターで、畜産の糞尿や、加工残渣、流通残渣を堆肥化することで、自然循環型農業の構築に取り組んでいる。また、山田バイオマスプラントでは、メタンガスを生産し発電を行う国のプラント実験が終了したものを、引き受けて管理運営を行っているものである。

【感想・岡崎市への反映】

今後の日本における成長分野として期待されている農業の6次産業化の成功事例として、千葉県の和郷園の視察をおこなった。

東京駅から、バスにゆられて、約1時間半。見渡せば畑が広がる台地のバス停に着くと、迎える車がやって来た。案内を行ってくれるのも、自ら生産者で農事組合法人の役員の方である。先ず連れて行かれたのは、農園リゾートである。真新しい宿泊コテージが並び、モダンなセンターハウスでスライドショーの説明を受ける。どんどん成長している成功事例には視察の来訪が盛んらしく、高額な視察負担金も足を衰えさせないらしい。

全体の説明と質疑の後、車で冷凍加工センターへ。工場内は撮影できず、掲示された説明パネルを読む。その後、向かいの建物で実際の解凍された商品を試食。ほうれん草やさつまいもスティックも美味しかつ

たが、1食分ずつが個別パックされたすりおろした山芋が美味しく、便利さを実感する。

それから、リサイクルセンターへ再び車で移動。家畜のし尿の匂いが漂うなか、説明を受ける。一般廃棄物、産業廃棄物の中間処理の許可を得て行っている施設だが、堆肥の生産より畑に施肥するほうが追いつかなくて大変だとのこと。また、バイオマスプラントも引き受けてみたが、割に合わず、今後が大変だという話であった。ただ、目指す理念や消費者の支持を受けるためには必要なことだろうと思う。

最後に風土村という道の駅のような産直施設とレストランが一体となった施設までおくってもらう。和郷園と直接つながっている訳ではないが、メンバーが半分程共有しているので、視察後の昼食はそのバイキングを利用してくれとのこと。新鮮な野菜の味を感じさせてくれるおいしい料理であった。行きとは別のその風土村から東京駅行きのバスに乗り込み、車窓を眺めながらこの視察について考えた。

先ず、今回案内してくれた人の話にもあったが、和郷園の成功は、代表である木内氏の力量による所が大きいと感じた。6次産業化を目指そうという方向は、やる気のある農業者であればもっているものであり、それを行政がどうサポートしていけるのかを考えさせられた。行政から和郷園に対しては冷凍加工センターの建設に対し補助が行われているが、それをあてにして事業化したものではなく、たまたまあったので利用したということのようである。

岡崎市においても、6次産業化で成功されている方もいれば、これから目指していこうという農業者もいるだろう。行政における6次産業化支援のメニューは国において提供されているし、行政としても応援したいものであるが、やはり、やる気のある人が、どれだけ才能を発揮するかが一番のポイントだろうと思う。そして人とのつながりをつくっていくことにより、それは成功へとつながるものだろう。そこに対しては行政が手伝っていける余地はあるのだろうなど感じた。もっといろいろ勉強する必要があると実感した。